能登町
伝説探訪

会いに行く猿鬼に

©永井豪／ダイナミックプロ

秋本「高山さ～ん、猿鬼歩こう走ろう健康大会の取材お疲れさまでした。ところで猿鬼伝説ってどんな伝説なんですか？」

高山「秋本さんは柳田出身なのに知らないの？」

秋本「少しは知ってますけど、実際に伝説の場所とか見たことないです」

高山「じゃあ、二人で猿鬼伝説ゆかりの場所を訪ねながら伝説について詳しく勉強しましょう！」

秋本「はい、よろしくお願いします！」

　というわけで、猿鬼伝説ゆかりの地を訪ねることになった高山さんと秋本さん。はたして猿鬼に会うことができるでしょうか？

地図上の番号は６・７ページの写真の場所です

猿鬼伝説

昔、当目村に岩井戸（岩屋堂）という洞窟があった。いつのころかこの岩穴に猿鬼と呼ばれる化け物が住み着き十八の鬼を家来として住民に危害を加えるようになった。この猿鬼を退治するため羽咋の気多大明神を大将、三井の大幡神杉姫を副将とする神軍が当目に向かった。岩穴から出てきた猿鬼に向かって神々が数千の矢を放ったが、猿鬼は手で矢をつかみ取っては投げ返し、岩穴に逃げ込んで姿をみせなくなってしまった。

　神々は一旦退散したように見せかけるため、現在の神和住で休息して、退治する方法を考えていた。ある日、神杉姫が輪島の稲舟村の歌波の浜で波の音に耳を澄ますと

「白布に　御身を隠して
　筒の矢を
　射させ給えよ　神杉の姫」

と和歌が聞こえた。これぞ天のお告げと喜んだ神杉姫は、神々に伝えた。再び岩井戸に到着した神々に住民は喜び、数反の布を献上することを決めた。

　神々は布に身を隠し、千の毒を塗った筒矢を用意して岩穴に向かった。岩穴から出てきた猿鬼に筒矢を放つと、つかもうとした筒の中から矢が飛び出し、猿鬼の目に的中した。目に毒矢の当たった猿鬼は叫びながら隣の谷まで逃げ、オオバコという薬草の汁で目の傷を洗い、鬼どもに助けられて岩穴へ逃げ帰った。

【猿鬼の絵馬】（1858年）
輪島市三井町の大幡神杉伊豆牟比咩神社所蔵

　岩穴に閉じこもった猿鬼をおびき寄せるため、神々は策を練った。今度は神杉姫が十二単を着飾り、琴・三味線の調べで岩穴の外から「猿よ、猿よ」と誘い出した。あまりの美しさに傷の痛みも忘れ岩穴から出てきた猿鬼を、神杉姫は隠し持っていた二尺一寸の名刀で討ち取った。首を切られた猿鬼は川の水を黒く濁らせるほどの血を流し、死んでしまった。主を失った家来の鬼どもは、天地が裂けんばかりに怒り、かたきを討たんと神杉姫に襲いかかろうとしたが、取り囲んでいた神々に討ち取られた。名刀は「鬼切丸」と名付けられた。

　猿鬼は「鬼塚」に埋葬されたが、亡霊となって現れるようになった。それを知った神杉姫は僧に姿を変え、十七日間にわたり読経するとようやく成仏し、猿鬼は光を放ちながら西の空に飛んでいった。平和に暮らせるようになった住民は、岩穴の下に小さな社殿を建立して猿鬼の霊を祀り「猿鬼の宮」と称した。

　神々が集まり神馬を休ませたところを駒寄（コマセ）、休息したところを神休（カミヤスミ）（転じて神和住：カミワスミ）、布を献上したところを一布（イチヌノ）、毒を採取し、毒矢を作ったところを千毒（センドク）（転じて千徳：セントク）、猿鬼の目に矢が当たったところを当目（トウメ）、猿鬼が目の傷をオオバコという薬草で洗ったところを大箱（オオバコ）、猿鬼の血が流れて黒く濁ったところを黒川（クロガワ）、その黒く濁った川が五十里も続いたというたとえから五十里（イカリ）として猿鬼伝説にまつわる地名が残されている。

伝説の地「岩井戸」へ

　柳田地区から当目地区へと車を走らせる。途中、「五十里」「黒川」「駒寄」「大箱」と猿鬼ゆかりの地名の看板を見つけながらも、地元の人が「猿鬼の宮」と呼ぶ岩井戸神社へと向かった。駐車場に車を止め、神社への階段を降りていく。右手には能登一の河川となる町野川の源流が静かに流れている。

秋本「高山さん、猿鬼はどこから来たんですか？」

高山「猿鬼はもともと輪島の大西山という所の釜ケ谷にいたという伝説があるの。大西山でも悪さをしていた猿鬼が追われて当目の岩井戸にたどりついたんですって。大西山には猿鬼の足跡といわれている**釜淵**や逃げるときに３つに踏み割ったという**三岩**などがあって、大西山の人は**猿鬼伝説発祥の地**として大切に伝承してきたのよ」

秋本「柳田だけの伝説じゃないんですね」

高山「他にも輪島市三井町の**仁行**、**本江**、**中村**、**洲衛**の地名も猿鬼が根城にしていた大杉の枝の広がりからついた地名といわれているし、瑞穂地区の**木住**にも似たような伝説があるのよ」

　鳥居をくぐり、川沿いを歩くと向こう岸に岩井戸神社が見える。岩井戸神社の紋章は目の玉に３本の矢が

※伝説には諸説があります。ここに掲載した猿鬼伝説は資料や地元の人の話を参考に編集したものです。
【参考資料　「猿鬼伝説～伝え残したい私たちの宝～」猿鬼伝説編纂委員会】